

後藤謙次

Goto Kenji

ドキュメント

崩壊する
55年体制

平成 1

政治史

岩波書店

ドキュメント

平成政治史

1

崩壊する55年体制

Goto Kenji

後藤謙次

岩波書店

後藤謙次

1949年生まれ。1973年早稲田大学法学部卒業。同年共同通信社入社。自民党クラブキャップ、首相官邸クラブキャップ、政治部長、論説副委員長、編集局長を歴任。現在はフリーの政治ジャーナリストとして活躍。共同通信客員論説委員。著書に、『日本の政治はどう動いているのか』(共同通信社)、『竹下政権・五七六日』(行研出版社)、『小沢一郎50の謎を解く』(文春新書)などがある。

ドキュメント 平成政治史 1 崩壊する 55 年体制

(全3巻)

2014年4月17日 第1刷発行

著者 ごとうけんじ
後藤謙次

発行者 岡本 厚

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
電話案内 03-5210-4000
<http://www.iwanami.co.jp/>

印刷・三陽社 カバー・半七印刷 製本・牧製本

© Kenji Goto 2014

ISBN 978-4-00-028167-6 Printed in Japan

〔日本複製権センター委託出版物〕本書を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上の例外を除き、禁じられています。本書をコピーされる場合は、事前に日本複製権センター(JRRC)の許諾を受けてください。

JRRC Tel 03-3401-2382 <http://www.jrcc.or.jp/> E-mail jrcc_info@jrcc.or.jp

ドキュメント
平成政治史 1
崩壊する55年体制

まえがき

日本の税制史上初めての大型間接税である消費税を導入する税制関連法が参議院本会議で可決、成立したのは昭和六三（一九八八）年二月二四日。クリスマススイブの夜だった。消費税導入に内閣の命運を懸けた竹下登首相は私邸に戻ると、こう漏らした。

「天皇陛下がご病氣と戦い続けて下さったお陰だ。感謝の言葉もない」

昭和天皇は消費税導入法案の国会審議と重なるように同年九月一九日夜、皇居で吐血された。ご容態は急変、年末には刻一刻とご病状は容易ならざる事態に向かっていた。竹下首相が危惧したことは年が改まると、現実のものとなった。昭和天皇は消費税法成立からわずか二週間後、翌昭和六四（八九）年一月七日に八七年八カ月の生涯を閉じられたのだった。

まさに消費税は、日本が歴史的変貌を遂げた昭和という時代が幕を下ろす間に生まれた奇跡的とも言える税制改革だった。その消費税は昭和から平成に変わった一九八九年四月一日に、税率三％で実施された。それからちょうど四半世紀を経た二〇一四年四月一日、導入から二度目の税率アップが行われ、八％となった。この税率八％を実施に移したのが安倍晋三首相。竹下氏から数えて延べで八人目の首相だ。単純計算すれば、平成に入ってから一内閣の在任期間は一年四カ月余に過ぎない。なぜ、これほどめまぐるしく政権が替わったのか——。ようやくいくつかの要因が見えてきたように

思える。

中でも消費税問題は平成政治を貫く最大の政治テーマと言っている。竹下内閣に始まり、消費税問題に絡んで退陣に追い込まれた首相は七人を数える。竹下氏を筆頭に宇野宗佑、細川護熙、村山富市、橋本龍太郎、菅直人、そして野田佳彦の歴代首相だ。平成時代でただ一人、五年五カ月の長期政権を担った小泉純一郎首相はこう語っていた。

「私の在任中に消費税率を引き上げることはいらない」

それが長期政権実現の要因のすべてではないが、一因であったことには間違いないだろう。橋本首相が税率を三%から五%に引き上げたのは一九九七年四月。安倍首相による八%への引き上げは実に一七年ぶりのことだ。法律上は二〇一五年一〇月一日から、さらに八%から一〇%への引き上げが決まっている。安倍首相もこうした過去の消費税をめぐる苛烈な結末を政治家として実際に見てきている。二度目の首相経験者としてその決断に踏み切るかどうか。今後の政治の行方を左右する最大の焦点の一つだ。

もちろん消費税だけが平成政治の流れのすべてを決めたわけではない。とりわけ特筆される昭和時代との違いは、衆議院の選挙制度が戦前から続いた中選挙区制から、小選挙区比例代表並立制に変わったことだ。この議論の出発点も八九年にあった。きっかけとなったのがリクルート事件である。リクルート社の関連会社の未公開株が自民党の有力者だけでなく野党議員、さらには旧文部省、旧労働省など中央省庁の高級官僚に譲渡され、多額の売却益を得ていたことが事件に発展した。「ぬれ手に粟」という言葉が事件の本質を象徴した。国民に大衆課税を強いる政治家が「ぬれ手に粟」では理屈

が立つわけがなかった。

やがてリクルート問題は政治改革を求める国民的なうねりとなる。竹下首相は八九年四月に消費税を導入した直後に、政治不信の高まりに対する責任を取って退陣に追い込まれた。もはや政治改革は「待ったなし」の課題になった。そこで金権腐敗政治の温床としてやり玉に挙がったのが旧中選挙区制。一つの選挙区で同じ政党から複数の候補者が当選する中選挙区制は候補者同士の「サービス合戦」がエスカレート、ひいては莫大な政治資金が必要となり腐敗を生んだ。

こうした選挙制度が持つ構造上の欠陥にメスを入れる動きが始まり、中選挙区制の枠内での改革を目指す制度維持派と小選挙区制を中心にした抜本改革派との対立が、自民党分裂劇に繋がった。政権交代可能な二大政党制を目指した抜本改革派の象徴的存在が小沢一郎氏。分裂の結果、九三年八月、三八年間続いた自民党一党支配は幕を下ろし、七党一会派による細川護国連立内閣が誕生した。この細川政権下で現行制度に移行した。

確かにこの制度によって二〇〇九年と二〇一二年の二度にわたって与野党の政権交代が実現した。しかし、新制度は候補者の公認権を執行部が握るため、執行部権限の強大化や「政治家が育たない」という大きな欠陥を抱えたまま、新たな矛盾を膨らませる。また選挙制度改革と同時に導入された政党助成制度が絡み合って執行部の奪い合いによる党分裂の常態化が多党化現象を招来させ、政治に求められる政策の継続性や安定化がそこなわれて久しい。各議員、各政党の最優先順位が「生き残り」になってしまっているのが悲しい現実ではないか。

「参議院の壁」も政治の停滞、混迷を招いた大きな原因だった。二大政党制の土台となる選挙制度

が衆院に導入されながら、繰り返された「衆参ねじれ」が、衆院側のパワーを減殺したからだ。いつしか「参院を制するものは日本の政治を制す」ということばが生まれるほど、参院優位の政治体制が定着した。結果として参院の問責決議が内閣不信任決議に匹敵する重みを持ち、生まれては消えるシヤボン玉の如く短命政権が続いた。ようやく二度目の再登板を果たした安倍首相によって衆院だけでなく参院でも与党が過半数を制し、「衆参ねじれ」が解消されたのが二〇一三年の参院選だった。ただし、これも自民党の単独過半数ではなく与党公明党を加えて実現できたにすぎない。

さらに平成時代の日本政治に決定的な影響を与えたのが国際社会の激変だった。まさに日本が平成元年を迎えた八九年一月一〇日、「ベルリンの壁」が崩壊。米ソ冷戦構造が終焉を迎えた。冷戦構造を前提に成立してきた自社体制は存在意義を失い、日米安全保障体制も変質せざるを得なかった。九〇年のイラクのクウェート侵攻に端を発した湾岸危機は日本に新たな国際貢献を迫った。その後、二〇〇一年の「9・11米中樞同時多発テロ」を契機に小泉純一郎首相は戦後日本政府が長く封印してきた自衛隊の海外派遣に道を開いた。その後は中国の台頭、北朝鮮の核実験実施と極東情勢も大きく様変わりした。

しかし、日本政治はこの間も政権交代が続き、長期的視野に立った外交方針は定まらず、なお混乱が続く。とりわけ小泉首相が毎年、靖国神社参拝を続けたことは、中国、韓国の反発を招き、冷え切った近隣外交は修復できずにいる。小泉首相は政権運営に当たって旧竹下派の流れを汲んだ旧橋本派外しの人事を徹底した。竹下派の系譜に中韓両国に太いパイプを持った議員が多かったことも関係改善が進まなかった隠れた要因でもあった。

安倍首相も二〇一三年二月二十六日、現職首相として靖国神社を参拝した。安倍首相と中国の習近平国家主席との日中首脳会談は一度も開かれず、また韓国の朴槿恵大統領との首脳会談は二〇一四年三月、オバマ米大統領の仲介によってようやく三者会談の形で実現されたに過ぎない。近隣外交はなお厳しい状況にある。

そして二〇一一年三月一日の東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故は日本人の価値観を大きく変えた。首相経験者の細川、小泉の両氏は「脱原発」を訴えて、安倍首相にエネルギー政策の転換を迫り、細川氏は二〇一四年二月九日に投票が行われた東京都知事選に立候補した。細川氏は敗退したが政府の原発政策に一石を投じた。

平成政治の混迷脱却がまだ道半ばであることは論を待たない。平成時代の日本の政治はどこで間違えて迷路にはまり込んでしまったのか。ほぼ四半世紀を経てなお出口が見えない平成政治を改めて原点に戻って振り返る必要があるのではないか。

言うまでもなく政治の営みは政権交代があっても途切れることはない。昨日から今日へ、今日から明日へと連綿と続く。だが、それを動かす主役は生身の人間である政治家たちだ。いつも冷静沈着であるはずがない。感情の起伏があり、好悪の情に流されて判断を鈍らせ、間違ふこともしばしばと言っている。それだけではない。人間だれしもが免れることができない老・病・死が政治の流れを変える大きな要素である。トップリーダーを目前にしながら病を得て無念の涙を呑んだ政治家も多い。安倍首相の父親で元外相の安倍晋太郎氏、みんなの党の渡辺喜美代表の父親で元副総理の渡辺美智雄氏らはわずかなタイミングの違いで大きなチャンスを失った。

平成時代の四半世紀の日本政治も個々の政治家の個性・運命を抜きには論じることができない。本書は平成の日本政治の流れを源流に遡って検証するに当たって、個々の政治家の「肉声」を交えて記録に残すことを試みたものだ。幸い筆者は一九八二年に共同通信社で政治部に配属されて以来、闘病を余儀なくされた約三カ月を除き今日に至るまで一日も欠かすことなく政治取材の現場に立ち続けることができた。本書執筆に当たっては駆け出しの政治記者時代の取材メモに始まり、自筆原稿の中から将来にわたってその時々 of 政治状況、政界の空気を象徴する「肉声」をピックアップした。

また、安倍晋三首相をはじめ多くの政治家に貴重な証言をいただいた。もちろん多くの先輩、同僚、関係者のご協力を抜きには文章を紡ぐことはできなかった。また、時代を投影し、深く掘り下げた多くの文献、著作、論考も参考にさせていただき、その一部も引用させていただいている。本書は全三巻で構成されており、参考文献は第三巻に一括掲載をさせていただくことにしている。また、過去の事実関係の記述に当たっては共同通信記事検索データベースを利用させてもらった。心から感謝申し上げます。なお、本文中は敬称を省かせていただいた。

二〇一四年三月末日

後藤謙次

装丁 Ⅱ 間村俊一

ドキュメント 平成政治史(全三巻)

後藤謙次

1 崩壊する55年体制

四六判四三二頁
本体三三〇〇円

【続刊】

2 小泉劇場の時代

—小渕内閣・森内閣・小泉内閣まで—

3 幻滅の政権交代

—第一次安倍内閣から民主党政権を経て、
第二次安倍内閣まで—

戦後政治史 第三版

石川真澄
山口二郎

岩波新書
本体九〇〇円

聞き書 野中広務回顧録

御厨出貴編

四六判三九八頁
本体二八〇〇円

聞き書 武村正義回顧録

御厨出貴編

四六判三五四頁
本体二八〇〇円

村山富市回顧録

薬師寺克行編

四六判二九八頁
本体二七〇〇円

岩波書店刊

定価は表示価格に消費税が加算されます

2014年4月現在

平成政治史 1 目次

第一章	昭和から平成へ 竹下登内閣	1
-----	---------------	---

第二章	超短命・非派閥領袖政権 宇野宗佑内閣	37
-----	--------------------	----

第三章	内外情勢に翻弄された竹下派「傀儡政権」 海部俊樹内閣	49
-----	----------------------------	----

1	「選挙管理内閣」の宿命	50
---	-------------	----

2	日米構造協議と湾岸戦争	68
---	-------------	----

3	退陣を呼び込んだ「重大な決意」	85
---	-----------------	----

第四章	最後の自民党単独政権 宮澤喜一内閣	101
-----	-------------------	-----

1	ラストチャンスだった総裁選	102
---	---------------	-----

2	PKO法案と政治改革	116
---	------------	-----

3	佐川急便事件の病巣	135
---	-----------	-----

4	自民党一党支配の終焉	160
---	------------	-----

第五章	五五年体制に引導 細川護熙内閣	185
-----	-----------------	-----

1	非自民の寄木細工政権	186
---	------------	-----

2	数合わせの限界	203
3	国民福祉税構想から突然の退陣へ	230
第六章 求心力なき「少数与党政権」羽田孜内閣……………241		
1	幻の渡辺首班工作	242
2	あっけなく崩壊した「一・一内閣」	255
第七章 自民党延命の緊急避難政権 村山富市内閣……………279		
1	「こげなことになった」	280
2	反村山の動きと新進党の誕生	296
3	阪神大震災・オウム事件	309
4	戦後五〇年の歴史的使命	335
第八章 経済危機に散った自民党復活政権 橋本龍太郎内閣……………347		
1	住専問題と普天間返還合意	348
2	一龍対決	367
3	「火だるま行革」の蹉跌	386

第一章

昭和から平成へ

竹下登内閣（一九八七年一月—一九八九年六月）



消費税が導入された
1989年4月1日、日
本橋のデパートでネク
タイを求める竹下首相

昭和六四（一九八九）年一月七日。つまり「昭和最後の日」は宮内庁長官藤森昭一の電話で始まった。藤森は首相竹下登、官房長官小渕恵三のそれぞれの私邸に相次いで電話を入れた。この日、東京地方はどんよりとした曇り空、最低気温は平年よりやや高い五・四度だったが、冷たい北北西の風が吹き付けていた。

天皇ご逝去

昭和天皇は前年の九月一九日、お住まいの皇居・吹上御所で大量吐血されて以来、この日が一日目に当たった。前年暮れから容体の悪化が伝えられ、政府部内には緊張が高まっていた。

「プロペラ飛行機が着陸する時と同じでプロペラの羽根が一本一本見えるようになった」

政府関係者の一人はそう語った。政府もマスコミも張りつめた空気の中で新年を迎えた。この日、だれよりも早く動いたのが侍医長の高木顕だった。高木は午前四時四七分、先導車のバトカーを警視庁に要請した。皇居から異変を告げる電話が入ったからだ。高木は公用車を使わず娘の運転する自家用車で皇居に向かった。続いて五時二一分に女官長北白川祥子、侍従長山本悟、そして五時四一分に皇太子（現天皇陛下）ご夫妻、浩宮（現皇太子）、礼宮（現秋篠宮）、紀宮（現黒田清子）、三笠宮ご夫妻、常陸宮ご夫妻の天皇ご一家が相次いで皇居に到着した。異変はだれの目にも明らかだった。

やや遅れて午前六時過ぎ、官房長官小渕は東京・王子の私邸で身支度を整えて首相官邸に向かった。